

Title	Moses Hadas, Hellenistic culture : its fusion and diffusion, Columbia Univ. Press. New York, 1959
Sub Title	
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.33, No.1 (1960. 12) ,p.112- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

Moses Hadas, *Hellenistic Culture:*

Its fusion and diffusion

Columbia Univ. Press. New York, 1959

ポリスの崩壊期からローマ帝政に至るヘレニスティック時代は西洋古代史の研究テーマのうちで最も困難なものである。その理由としては研究対象の複雑さに加えて、文書の散逸があげられる。

それ故、ヘレニズム史は十九世紀のクラシクな史學研究方法では或る程度までしかまとめられなかつた。ところが、オリエント世界の考古學やフィロロジの進歩につれて、ヘレニスティック研究にも新しい光がさし始めた。廣大な領域、特に西アジアの諸都市やエジプトの發掘はこの時代の生活や文化、その傳統や變化の眞相を示すようになった。こうして、ヘレニスティック世界の統一した學問的把握が可能になり、社會經濟史では Rostovtzeff のヘレニズム史がそれを試みた。Hadas の本書はそれをもとにして、Augustan Principate の成立に至るヘレニスティック文化の統一的把握を試みたものである。

しかし、ヘレニスティックの文化史・精神史となると、困難は社會經濟史より更に大きい。それを知らなくては本書の價值を正當に

評價出来ないであろう。——ドイツ古典主義以來のギリシア文化への讚美はそれを所謂アポロ的なものと規定し、他のすべての文化を判斷する基準とした。そして、それを喪失したヘレニスティック文化は墮落であるとされた。こう云うギリシア觀は Nietzsche の直觀的批判や Harrison, Murray 等による實證的な研究によつて改められたが、上記のようにオリエント世界の眞相が明らかになるにつれて、ギリシア文化の基底のより暗い部分の中に、すべての古代民を貫いていた共通の部分があると云うことがはつきりして來た。Hadas も又こう云う共通性の認識をもとにしてヘレニスティック文化論を展開する。ここにはもはやヘレニスティック文化への古典的過少評價、その墮落視は存在せず、却つて獨自の價值を持つた創造的文化運動の時代とされている。

この共通性の認識は古代末期の思想研究でのこれまでの基本的圖式即ちヘブライズム對ヘレニズムと云う把握が余りに觀念的に行われて來たことへの反省と結びつく。これまでギリシア人の哲學の理性主義とヘブル人の宗教の超越主義だけと云う二元論によつて、原始キリスト教思想の形成までのヘレニスティック思想が説明されて來たが、ここから東西の思想の流れの統合の過程がヘレニスティック世界の現實の發展に即して捉えられず、それから浮き上ると云う欠點が出て來た。ユダヤ教徒、キリスト教徒及びそれに對立するものとして設定されたギリシアの哲學者、そして兩者の融合をめざす少數の思想的巨人の他には思想も文化もなかつた

のであろうか。むしろ、この運動の中間地帯にこそ大多数の人々の信條があり、それがあの時代の文化を動かして、新しい西洋文化の傳統を生み出したのではなかつたか。本書はこう云う疑問に示唆に富んだ回答を示してくれるであろう。

Hadas はまず、ギリシア人の思想とオリエント人の思想との絶對的隔絶を否定し、人間の文化に關して絶對的に宗教的とか、絶對的に理性的とか云う捉え方に反對し、人間の“construction”は十分に“homogeneous”であると強調する。この主張は「信念」などから出てくるのではなく、最近の（特にアメリカの）社會學の捉えた人間性の分析に基礎を置いている。Hadas はそのために Ruth Benedict の人間活動の能力の分野に關する理論を用いる。とにかく、そうして解することは、あのように相反するものとして設定されて来たヘブライズムとヘレニズムとさえも、互いに“contiguous”な部分を分ち持つてゐること、各文化は「多くの不可欠の部分に於いて“overlap”してゐる」ことである。Hadas はこの考えを裏付けるものとして、前記の古代諸文化の共通性の認識を持ち出す。いくつかの問題について、それぞれの専門家たちのモノグラフィが要約されている。——オリエント學の進歩がギリシア世界と他の古代世界の太古からの交流、相互の密接な關係を増々明白にして来たが、レヴァント地方を交流地點とする、インド・メソポタミア・アラビア・エジプト小アジア・エーゲ海などの先史時代にさかのぼる文化の共通性こ

そ、ヘレニスティック文化の“fusion and diffusion”の根本的な源泉である。Hadas は例えば Gilgamesh 物語のインドからギリシアに至る同一原型説、又プラトンの「イデア」説の考え方のスメル時代からの存在などをあげている。Hadas はこう云う共通性をヘレニスティック時代の文化の“fusion”の基盤と看做す。かくて東西の「時として起る遭遇は新しい體驗と云うよりも“recognition”の性格を持つてゐる……だから、我々はあれこれの基本的な觀念がどつちからどつちへ傳つたのかなどと論ずる迄もないし、外來のものと考えられる事へのあれこれの民族の感受性を不思議がる必要もない。「ギリシアと東方との間に貫き難い壁がなかつたことは明白である。」

社會科學の進歩はそう云うことを保證する理論を提供してくれるばかりでなく、個々の問題の解決に方法を與えて、從來の史學の方法では解明出来なかつた史實をも我々に認めさせる。上記のオリエントとギリシアとの文化の共通性にしても、單に「似ている」ことを理由にしてそう云われるのではなく、史學以外の社會科學（例えば、神話學とか民族學とか）の方法から來る十分な保證をともなつてゐる。文化の“fusion”の過程を探求する時、こう云う方法による歴史の構成は十分科學的であると同時に、又書かれた史料が斷片的にしか残存してゐないため、純粹の史學的操作では確信をもつて決定し得ない以上、その方法の採用は必要であるし、止むを得ない。Hadas の研究には、社會學の見方の

影響が濃く、本書にも例えば、“acculturation”のような戦後の社會學の用語が現われている。

Hadas はイザヤ書と Sybillini Libri 又後者と Vergilius の作品との關係を重視して、ラテン文學のキリスト教世界での廣い流布の原因は、それがヘブライ文學の思想をうけ繼いでいるからであると結論する。——本來なら、これ等の間に關係の起つた時と場所が具體的な事件として提示されることを要求されることである。思うに、そう云う提示なしにこうした關係を肯定することを、史學とは別の社會科學の方法が保證してくれるのである。この方法はオリエント思想の色彩が濃厚であつても、それを證明する具體的な證據を缺いているローマ帝國時代のネオ・プラトニズムの史的解明などにも適用し得るであろう。又、社會現象として思想を立體的に捉えると云う點で、從來の純フィロロジカルな方法に優つているとも云えよう。

Hadas は以上のような方法と前提に立つてヘレニスティク文化の“fusion”と“diffusion”の様子を分析して行く。博識な著者による documentation は豊富であり、年代も可能な限り配慮されていて、説得力がある。

とは云え、ヘレニスティク世界が始まる前にギリシア人と所謂バルバロイの間に一種の隔絶があつたことは事實である。Hadas はその原因をバルシア戦役で勝つたギリシア人の優越感にあつたと考へる。こうして、外國人を「蛮人」と呼ぶ風習が起つたの

であるが、ギリシア人の文化が世界化するためには、こうした“exclusiveness”が除かれなくてはならない。そして、この偏見の除去者として、Isocrates が強調される。次に、言語・宗教・教育・修史・藝術・法律・政治形態等の各分野の“fusion”がいろいろに考察されるが、おゝむね(a)ヘブライズムとヘレニズムの融合の過程(b)「蠻人」たちのヘレニズムへの反應・適合(c)新しい傳統の形成、それがローマ世界に入り西洋の傳統となる過程、と云う三點が中心課題となつている。“fusion”の強調から、例えばストア主義は最初からセム的色彩の強いものとされる。そして、Augustan Principate のイデオログとなつたストア哲學者を始め、文學者・歴史家達もギリシアの傳統によりも、旧約のそれにより強く影響されたし、帝政自體が法や國家の理念の上でも東方の神權政治であつたこと、帝政の政治・文化の支柱はヘブライ的歴史使命感を哲學として組織化した(從來この功績は Augustinus に歸されていたが) Poseidonios の歴史哲學であつたこと等が述べられる。このように理解されたローマ帝政の理念は、例えば M. L. Clarke (The Roman Mind, 1956) の説明よりずっと説得力がある。(Clarke の説明では、東方思想の西進が殆んど無視されているので、帝政の神權政治的側面やローマ帝國時代の oriental paganism の異常な生命力などは少しも理解されない。)又、東西の“fusion”を史實に密着させて理解

する時、キリスト教思想の形成について次のように云えるのは當然である。「キリスト教が借り受けをしたのは身遠な異教的環境からではなく、考古學やフィロロジの發見物と共にクムラン文書が示しているように、既に Hellenize されたユダヤ教からである。」それ故、西暦元年に至るヘレニスティク時代のパレスチナ社會史の研究の重要性は極めて大きい。Hadas はキリスト教の傳統のうち、祈りや告白・天國思想等についても考察を加えている。

要するに、本書はヘレニスティク文化が西洋の傳統の母胎であることを組織的に明らかにし、その文化の偉大な生命力に對して西洋史の流れの中で正當な地位を確立させたものである。これによつて、ギリシア・ローマ・中世と並べてヘレニスティク時代を過少評價する從來の修史に反省を起させ、オリエント世界を含む古代史のより綜合的理解を可能にさせるであろう。我々は機能的な方法と歴史的方法とをかたよらずに用いることによつて、ヘレニスティク世界の社會や經濟現象の構造とその歴史的・空間的方向を解明し、文化との關連づけに努力すれば、本書では不十分なかかる文化運動の必然性までを理解しうるであろう。

著者は Columbia 大學教授であり、過去十年余りの間に古典に關する著書・英譯が多數ある。
(小川英雄)

「港區史」上・下卷 (東京都港區役所編・發行)

このたび、昭和三十五年三月十五日、「港區史」上下卷の刊行をみた。上卷千百三十六頁、下卷千六百五十八頁、二卷合わせて二千八百頁におよぶ大冊である。昭和三十二年二月同區の誕生十周年記念事業の一環として計畫され、同年六月編纂に着手して、滿三年の歳月を費し完成したもので、計畫の當初たまたま當局者から相談をうけた一人としてまことに同慶に堪えない。しかも、名義上は港區役所編とはなっているものの、實際にこれが編纂にたずさわつたのは、ほかならぬわが慶應義塾大學の教授松本芳夫氏ら義塾の人たちで、松本教授はみづから監修にあたられ、編纂主任にはこれまた義塾出身の武藏工業大學教授武田勝藏氏が任じ、その下にも二、三の塾員が關與したのであつた。

内容は上卷を四編にわかち、第一編序説、第二編街史、第三編原始時代、古代、中世、第四編近世として、江戸時代のおわりまでをあつかひ、下卷に第五編近代、第六編現代の兩編をおさめている。近代というのは明治維新から太平洋戦争の終結までで、その後昭和二十二年三月東京都内の芝、赤坂、麻布舊三區が合して出來た港區の、誕生から現在までを現代とするのである。したがつて、本區史の眼目とするところはいわばこの第六編にあるべきで、それに舊三區時代についてはそれぞれ「芝區誌」、「麻布區